～第48回（令和5年度）作文コンクールより～

「小さな親切」作文のご紹介

内閣総理大臣賞

作者が闘病中に同じ病棟に入院していた男の子の母親で、たくさんの優しさをくれた〝みーみーさん〟への感謝を綴った作品です。昨年11月の全国表彰式では、「いっしょに病気と闘ってくれてありがとう」と、みーみーさんがサプライズで作者へお手紙を寄せてくださり、会場は大きな感動に包まれました。

全国表彰式では、みーみーさんからの手紙を司会のアナウンサー・石井麻由子さんが朗読。

みーみーのゆう便屋さん

香川県 多度津町立豊原小学校 5年 春田 凛々花

私は、５才のときに病気にかかり、入院していました。ずっと点てきがつながっていて自由に動けなかったり、薬のせいで食欲がなくなったり、気分が悪くなったりと、入院生活はとてもつらいことだらけでした。

そんなとき、私を元気にしてくれた人がいます。その人は、同じ病棟に入院していた年下の男の子「こうちゃん」のお母さん、「みーみー」です。

みーみーは、自由に動けないベッドの中でも遊べるようにと、かさ袋で風船を作ってくれました。食欲がないときは、食べやすいおかしをくれました。空き箱や割りばしで、工作を教えてくれることもありました。みーみーは元保育士さんで、いろいろな楽しいことを知っていて、周りの子どもたちのヒーローでした。

なかでも心に残っているのは、病棟内の「ゆう便ごっこ」です。手作りのポストを病室の入り口に置いて、手紙やおかしの交かんをするのです。『おすすめです。見終わったら〇号室まで』というメッセージ付きのDVDが届くこともありました。何が届いているかなあと、私はわくわくしながら、一日に何回ものぞきに行きました。

私にとって、みーみーからの手紙は特別でした。

『今夜、病院内の散歩に行きましょう。こうちゃんとむかえに行きます』

みーみーから手紙がくると、私はすごくうれしくて、すぐに返事を出しました。初めて行う治りょうの前の日にも、

『うちのこうちゃんが、泣かないでできたんだから大丈夫。終わったらまた散歩しよう』と、はげましの手紙が届きました。年下のこうちゃんができた治りょうなのに、お姉さんの私が泣いたらはずかしいと思い、勇気をふりしぼって治りょうに行くことができました。

実際、痛くも怖くもなく、へっちゃらでした。みーみーの手紙がなかったら、私は怖くて泣いていたと思います。みーみーのゆう便ごっこは、手紙やおかしだけではなく、元気や勇気を運んでくれました。

数カ月がたち、こうちゃんの転院が決まり、病院に残る私とお別れすることになりました。そして、私は本当のゆう便屋さんで手紙を出すことを約束し、連絡先を交かんしました。

3年後、私はまた入院することになりました。すごくショックで、みーみーに手紙を出しました。すると、すぐにみーみーから一つの大きな箱が届きました。中には、星の形の千羽づる、たくさんのおかし、笑顔のみーみーの似顔絵と『がんばれ!』の手紙が入っていました。

みーみーがいつも応えんしてくれている、天国のこうちゃんにはずかしい姿を見せたくない、という思いでいっぱいになりました。そして、もう一回がんばろうという強い気持ちになれました。

みーみーの小さな親切は私の宝物です。私は、みーみーのように親切を配るゆう便屋さんになりたいです

※作者の学年は受賞当時